

松下幸之助記念志財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】

館内魁生

【所属】(助成決定時)

東北大学大学院文学研究科

【研究題目】

模倣行為からみる文化変容と社会 ―古代日本 北の「ボカシの地域」を舞台として―

【研究の目的】(400字程度)

“模倣”は異文化を受容する際に見られる普遍的な行為である。模倣行為には異文化への「憧れ」や「ライバル意識」など、ある集団や個人が異文化を受容する際の様々な意識が反映される。本研究はこの模倣行為を切り口として、異文化の受容と文化変容のモデルの構築を目的とした。特に、「〇〇文化の影響を受けた」といった伝播論的な説明ではなく、文化の受け手側の意識に着目した新たな説明を目指した。

古代日本は異文化接触地域を南北に持つ特有の歴史環境にあった。即ち、北海道・北東北の「北の文化」と南西諸島の「南の文化」およびこれらに挟まれた「中の文化」である。これらの文化は「ボカシの地域」と呼ばれる中間地帯で接していた(藤本強 2009『日本列島の三つの文化』)。本研究は北の「ボカシの地域」である東北地方から北海道南部をフィールドとし、「北の文化」が「中の文化」を受容する様相の解明を目指した。

【研究の内容・方法】(800字程度)

土器は最も普遍的に存在する考古資料であり、人々の生活に密着した道具でもあった。古代日本と「北の文化」では作り方や形の異なる土器が使われていたため、北の「ボカシの地域」「北の文化」圏で古代日本型の土器がどのように模倣されたかを知ることで、土器の受容の様相が分かる。本研究では以下の方法を用いて、模倣の“程度”をより客観的に評価する。

《土器の形態に関する分析》

土器の形態が「どのくらい似ているのか」を量的に把握するため、生物学で発展した幾何学的形態測定学の手法を用いた。この方法は土器の形を数値化し統計的に処理する方法で、地域間の土器の形の違いが数値として可視化される。これにより、模倣の程度を客観的に評価することが可能となる。

《土器の作り方に関する分析》

土器の作り方は人から人へと伝えられるなど、より直接的な交流がないと模倣されない。そのため、作り方の模倣の程度によって地域間の交流密度を知ることが可能である。作り方は土器に残された製作時の痕跡を観察し推定するが、その観察・推定の精度を担保するため、実際に土器の製作(製作実験)を行った。

本研究では土器を作る際に使用した工具に注目し、工具とその痕跡の関係を実験で裏付けた。この工具は京都や東海地方で使用されていたものだが、これが貞観地震を機に東北地方南部に拡散することや、「北の文化」圏にまで及ぶことが判明した。

【結論・考察】(400字程度)

当初、北海道南部の5遺跡を対象とする予定であったが、新型コロナウイルスに係る移動制限のため分析することができなかった。そこで、特に青森県から岩手県・秋田県北部の約40遺跡について分析(資料調

査)を行った。時代は10世紀から12世紀とした。

暫定的ではあるが次のような見通しを得た。「中の文化」圏では中国産陶磁器や金属器が高級食器として扱われ、これらの形態を土器で模倣していた。興味深いことに、この中国産食器の模倣は「北の文化」圏の一部地域でも見受けられ、「北の文化」圏の人々も中国産食器の形態に“憧れ”を抱いていたと推定される。さらに、東北地方日本海側では南部より北部(青森県)の方がオリジナルの形態と類似度が高かった。これは、交易によって陶磁器そのものが「北の文化」圏に直接搬入された影響や、「中の文化」から離れるほど“憧れ”が強くなった可能性が想定された。ところが、11世紀になると北の「ボカシの地域」「北の文化」の独自性が強くなり、「中の文化」に対する意識の変化が窺えた。何らかの軋轢が生じたと考えられるが、検討中である。

以上のように、これまで「律令国家の影響」として説明されることが多かった当該地域の社会や物質文化について、模倣を行った側の視点からの説明を試みた。模倣行為を切り口としたことで、異文化に対する意識を考察することができた。今後はこの地域で見られた文化変容がより一般化できるか等を検討したい。なお、本研究の成果の一部はCAA Australasia (Computer Applications and Quantitative Methods in Archaeology) や国内学会で既に公表している。発表資料やレジュメは助成者のリサーチマップ (https://researchmap.jp/k_tateuchi) でも公表しているので、そちらもご覧いただければ幸いである。